蒼葉
裾野市立深良中学校だより
平成25年2月8日発行
第　34　号
発行人　校長　鈴木史良

“雨の私立高入試”

―― 私立高校受験に精一杯の力で挑む3年生 ――

２月６日（水）、７日（木）は県内の私立高入学試験が行われました。本校３年生が受験した私立高は御西高、日大三島高、三島高、飛龍高、誠恵高、加藤学園高、桐陽高、沼津中央高の８校で、計４４名の生徒が受験に臨みました。

初日の６日（火）はあいにくの雨。しかし予報では降雪の可能性もあったので交通機関などが混乱するのではないかと心配しましたが、雨だったため特に交通が混乱することもなく、受験生たちはスムーズに受験会場に到着できました。

職員は３年部の先生方を中心に、万全を期して私立高入試に臨み、学習指導以外にも受験に関わる諸手続や面接指導、当日の準備物の確認等、きめ細やかな指導を重ねてきました。前日指導で私が話したポイントは次の５つ、これらの話を通して真剣な表情で聞く受験生たちにエールを送りました。

１　心身のコンディションを整えて臨むこと。
２　忘れ物をしないよう事前に入念なチェックをすること。
３　試験場の雰囲気に呑まれないよう、自分のやってきたことを信じること。
４　テスト問題は時間配分を考え、最後まであきらめないこと。
５　面接試験は心にスマイルをもって、明るくはきはきと受け答えすること。

＜受験後の生徒たちの一言感想＞

● テスト問題は少し難しい問題もありましたが、基本問題が多かったので解きやすかったです。面接は自分の書いたカード通りにいかなくて、つっかえてしまう場面もありましたが、内容をしっかりまとめて伝えることができたと思います。
（飛龍高受験者）

岩波駅で切符を買う生徒たち

● 生まれて初めての面接試験で、学校では何回か練習したけれど、学校のようにうまくいかず、言葉がつまってしまったり、席に座って待っている時も震えが止まりませんでした。でも、面接官が空気を少し和ませてくれたので、時々笑いがでることもありました。終わった後は頭が真っ白で、自分が何を言っていたのか覚えがありません。
（沼津中央高受験者）

受験を前に早朝の岩波駅で

椹野市第30回英語日本語スピーチコンテスト

２月２日（土）に生涯学習センターで英語日本語スピーチコンテストが開催され、市内の中学生１６名による英語スピーチと市内に在住する外国人による日本語のスピーチが行われました。本校代表として２年生３名が参加し、大勢の観衆が見守る中、堂々とした立派な発表ができました。本校でははじめに井上瑠南さんが登場。題は“The Play ‘Inochi no Yosui’Changed us”（演劇‘いのちの用水’が私たちを変えた）で、多くの困難に直面してもみんなで力を合わせて乗り越えていきます、と堂々とした態度でスピーチしました。次に登場したのが荻野芽生さんです。題は”The important thing I’ve learned from a Japanese abacus”（日本のソロバンから学んだ大事なこと）で、昨夏珠算の東部大会で２位入賞したことの喜びを表現しました。本校で最後に登場したのは細井美紀さんでした。題は“My Dream”（私の夢）で、９歳の時にかつて母がホームステイした米国の家庭を訪問した経験を語り、今度は私一人で訪問したいという夢を語りました。３人とも一所懸命さにあふれ、見事な発表ぶりでした。

すばらしい発表をした深中生たち

先輩の残してくれた言葉

授業を通して、深良中の生徒たちは何事にも“一所懸命”取り組むことができる素晴らしい力をもっているなと感じました。

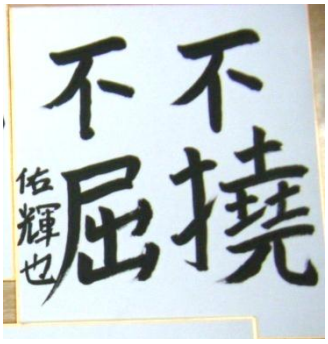
生徒一人一人、好きなこと、得意なこと、やりたいことが必ずあると思います。その大きな目標に向かって、どんなつらいことがあってもあきらめず、“一所懸命”努力できる人間になってほしいです。

福士　優太朗

一所懸命がカッコいい

グラウンドで朝練に励む福士先生

“不撓不屈（ふとうふくつ）”という言葉



立志式で西島君が高く掲げたこの言葉。私は学生時代にこの四字熟語を「ふぎょうふくつ」と読んで恥をかいた思い出があります。辞書によると、出典は漢書叙伝で、「撓」は漢音で正しくはドウと読み、トウは慣用音だそうです。意味はたわむこと、屈すること。全体としての意味は、強い意志をもってどんな苦労や困難にもくじけないさまを言います。

将来、直面するかもしれない多くの困難から逃げずに正面から向き合い、力を合わせて乗り越えようとする深中生の姿に重なります。